

「現実」と「非現実」の両立を目指す映像作品 『箱庭ユニリアル』

田中 孝明
(近藤晴夫ゼミ)

はじめに

私たちの作品は、4人の監督がそれぞれの監督のもとで作った4本のショートムービーを集めた短編集である。

卒業制作に取り掛かる際、まず各々の作りたい映像作品の構想を提示し合い、それらに共通したものは何かということ話し合った。その結果、全作品に一貫したテーマは「現実」と「非現実」に決定した。この2つを比較したり、融合したり、あるいはどちらか一辺倒にすることで4本の映像は1つの作品として成り立っている。

タイトル『箱庭ユニリアル』の由来

「箱庭」とは、浅い箱の中に土や砂を敷き、そこに植物や石、模型の家などを配置して庭園を模したものである。タイトルの「箱庭」の「箱」という文字には、型にはまっていて抜け出せない「現実」の閉塞的なイメージを、「庭」という文字には、あらゆるものから解き放たれて「非現実」を描くことができる自由なイメージを当てはめている。

各作品の導入部分で、芝生の上にある箱の中を除くと作品が始まる、という表現がある。ここでは「芝生」を「庭（非現実）」として捉えてもらいたい。つまり、オブジェクトの位置関係を外から表すと「庭→箱→庭」ということになる。この映像が意味するのは、「非現実の中に現実が、現実の中に非現実が、・・・」ということである。

「ユニリアル」について、「ユニ (uni)」とはラテン語の数詞で「1」を指し、名詞の頭に付いて「単一の」という意味を表す接頭辞である。「リアル (real = 現実の)」に「ユニ」を合わせることで、あらゆる現実を（ときには非現実すら）等しく扱う、という意味を込めようという意図がある。

監督作品『生まれる前の話』について

脚本が出来るまで

脚本を書き起こす前に、自分の作品に反映させたい自身の映像メディアに関する経歴とアイデンティティを明らかにするため、大学に入る前と後の自分について考えてみた。

私の実家は、父が通信工事の仕事をしていたこともあり、衛星放送サービスの「スカイパーフェクトTV！」(現・スカパー！プレミアムサービス)に加入していた。当時、よしもとクリエイティブエージェンシー（吉本興業）のNSCを筆頭とするお笑い芸人の養成所が若手芸人を次々と輩出していた大量供給・大量消費の時代ということもあり、世間のお笑いブームに乗ってか、私はスカパーの「ヨシモトファンダンゴTV」ばかりを見て育ってきた。そこではテレビ放送向けに作られた番組の他に吉本興業が所有する劇場の舞台中継等が放送されており、当時の私はテレビ番組が好きというよりも、お笑い芸人自体と彼らのネタ・イベントの舞台が好きだったように思う。

一方、大学に入ってから映像表現の知識を学び、その面白さを知った。またジャンルを問わずテレビ番組や映画を視聴するときは、画作りやカット割りを意識するようになった。特に映画を見る機会は入学前よりも断然多くなった。

大学に入る前と後、2人の自分を足して考えた結果、卒業制作は分かりやすい笑い種と高尚な映像芸術を同時に追求した映像作品を作りたいという考えに至った。そこで私が手掛ける作品は、コント（舞台演芸）とドラマ（映像芸術）両方の側面を持ったものを目指して作ることにした。この度の作品に2つの要素が取り入れられているかどうかは、見る人の評価によるところである。

「現実」と「非現実」の両立を目指す映像作品『箱庭ユニリアル』

注(1)

当稿で使われる「ドラマ」はテレビドラマや劇映画を指すこととする。

本来「ドラマ」という言葉のニュアンスに映像の要素は含まれないが、日本では一般的に「ドラマ＝テレビドラマ」という認識が広く共有されていること、作品を見る媒体がテレビやスクリーンとは限らないこと、対照となるものが同じく片仮名3文字の「コント」であるため語感が良いこと等の理由で採用した。

あらすじ

生まれる前の命が2つあった。地球で人間が作ったツールで遊ぶ彼らの元にメールが届く。内容は彼らが何として、いつどこで生まれるかを記したものだ。自分たちが双子の人間として生を受ける予定だと知った彼らは、余生(?)をその準備に費やす。一方その頃、当の人間たちが暮らす世界では不穏な動きがあった。そんなことは露知らず、2つの命はこれから送る人間生活に思いを馳せていた。

どこが「現実」でどこが「非現実」か？

ごく日常的(現実的)なシチュエーションの中に非現実な存在、例えば創作物の登場人物や歴史上の人物が現れ、場にそぐわない言動を繰り広げて笑いを取る、というコントの様式がある。この作品ではその逆、つまり非現実的なシチュエーションの中で日常的な言動をするという様式で脚本を組み立てた。これもコントの様式の1つとしてよく見られるものだろう。

脚本の方向性を決めたのは、エドガー・ライト監督のホラーコメディ映画『ショーン・オブ・ザ・デッド』(2004・英)の影響によるところが大きい。特に劇中、主人公ショーン(サイモン・ペグ)とその親友エド(ニック・フロスト)を襲うゾンビに対し、ショーンが集めていたレコードコレクションを投げつけて応戦する、というシーンがある。「ゾンビが襲ってくる」という非常に切迫した状況であるにも関わらず、彼らは一々「それは投げている」だの「それはプレミアム物だから駄目」だのという吟味をしてから投げつけている。

非現実的な状況に置かれた2人の、何と悠長なことか。まるで引っ越しのために荷物を整理しているかのような、非常に日常的なシーンに見える。このシーンが持つ「現実」と「非現実」の見事な両立は、今回表現したかったものの大部分を占めている。

さて、書き上がった脚本『生まれる前の話』において、物語は2つの世界の同時進行で展開される。1つは生まれる前の命たちがいる世界、もう1つは私たちが暮らす現実世界だ。主軸になるのは前者だ。前者のシチュエーションは非日常的、つまり「非現実」的である。2人の登場人物は「生まれる前の命」という非常に曖昧な存在で、想像の産物に過ぎない。しかし、その2人がやっていることといえば、PCや携帯を弄ったり、ジャンケンで物事の優劣を決めたりと、私たちがやっていることと何ら変わりはない。つまり、「現実」的なのである。

演出面の工夫

私が目指したのは、「コントのようなドラマ」である。そのため、脚本を書き起こす際コントとドラマの相違点を考える機会が多かった。

その中の1つとして、ドラマの多くは場面転換を有するが、コントは1つの場所で完結する、という点が挙げられる。あくまで一例に過ぎないが、ドラマには、同時に別々の場所で起きたことがある時点で繋がる、という面白さがある。一方、コントは1つの場所であらゆる出来事が起こり、それぞれが笑いを誘う。

コントの性質上、内容に面白味を出すのは脚本と演者によるところが大きく、「1つの場所」という拘束があるため、画作りがワンパターンになりがちである。私はコントのそんな一面を愛おしく思い、所々で強調させたいと考えた。そのため、主軸となる場面の背景はあくまで白い部屋1つであり、無駄な装飾の一切を省いた。また、舞台演芸を見ているかのような気分させるために、2人をただ真正面から撮ったニーショット、あるいはフルショットを各シーンにつき必ず1回以上は使うようにした。

それとは逆に、コントや漫才では見られないようなカットを使うことも意識した。会話する場面

では肩ナメのショットを多用したし、演者2人の動きだけでは表現できないような微妙なニュアンスを画の構図で示唆する試みもあった。

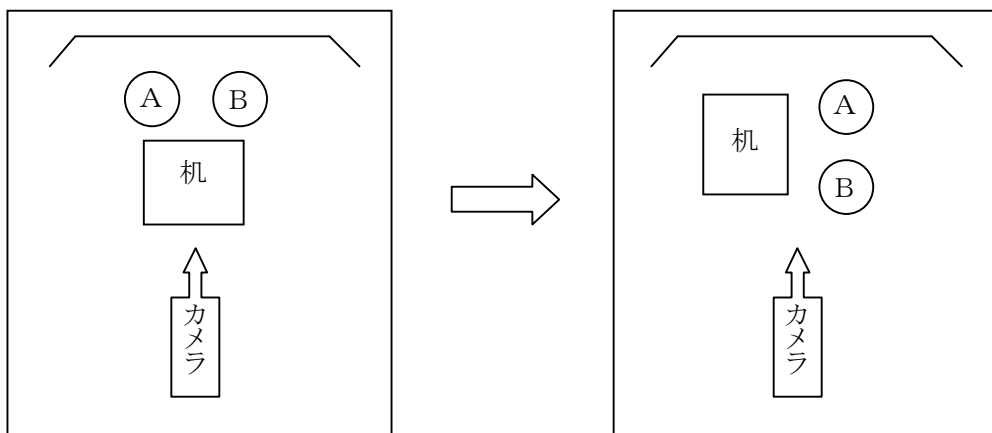
また、ドラマとしての強み「場面転換」を活用している部分もある。特に、白い部屋から現実世界に、現実世界から白い部屋に切り替わる場面だ。

劇中、登場人物2人がジャンケンで兄か弟かを決めるシーンがある。私は映像表現の持つ「描写されてない時間の出来事を想像できる」という事象を実践したいと考え、このシーンを盛り込んだ。ここで注目してもらいたいのは、「ジャンケンの結果は映さないが、その後の描写で結果が分かる」ということである。勝負の掛け声は「ジャンケン・・・」で途切れてしまうが、一度現実の映像を挟んで、その後、互いが互いを「弟」「お兄ちゃん」と呼び合うことによりどちらが勝利したかが

誰の目にも分かるようになっている。

撮影について

撮影のほとんどは朋文館マルチスタジオで行った。セットの白い部屋の壁はスタジオにあるパーティションを使用した。部屋の一角を作るためにはパーティションの数が足りないということに当日になって気がついた。会話するシーンのために演者2人を並べて肩ナメのショットを撮ろうとすれば、必ず背景の壁の端や置いてある機材が見えてしまう。この問題を解決するために、カメラの位置を固定して演者や小道具の配置自体を逐一変えるという手法をとった。その結果、手間は増えたが、画角を限定することなく伸び伸びと撮影することができた。



カメラを振れば
壁の端と奥が見える

カメラは動かさず、
A、B、机の位置を90°
回転させる

挿入曲

BGMとして、著作権フリーデジタル音素材集音・辞典VOL. 21から『情景／アコースティック・ピアノA・B』を使用した。

作品の雰囲気やオチから逸脱した情緒あふれる旋律に、「やかましいわ!」と思ってもらえることを期待したい。

各シーンの補足とエピソード



シーン1

人間のツール弄りに勤しむ2人（命）にメールが届く。そのメールにより、2人は双子として生まれることが分かった。

この後、何度か挟まれる現実世界のカットは白い部屋と差別化のために敢えてピントを合わせず、全体的にぼやけさせている。2枚目と3枚目は上記にもある演者とセットごと動かしたカットの内の1つ。2人が見ているのは google ストリートビューらしきツールという設定。



シーン2

どちらが兄かで揉める2人。結局ジャンケンでそれを決めることになる。

全編において言えるが、カットの繋ぎを自然にするために、演者の2人には次のカットの始めの動きまで演じきってもらった。そのおかげで編集が大変楽になった。

掛け声が「ジャンケン…」の時点でブラックアウトする。





シーン3

母親の胎内で暇つぶし方法を考える兄。一案として挙がったポーカーに興じる。

始めに互いを「弟」「お兄ちゃん」と呼び合う場面があるが、おそらく最も演者に無理を強いた部分だろう。芸人のコントのようにオーバーな動きを注文したが、演者は恥じらいながらも応えてくれた。

後ろに先程使っていたPCが置いてあるのは、一応身辺整理という設定がある。



シーン3.5

現実世界のカットに必ず登場した男がアパートの一室に帰宅する。このあたりでようやく、現実世界の主人公はこの男だということが分かるかもしれない。



シーン4

汚いオチのシーン。

2人に待っていたのは、男の自慰によって無益な消費をされてしまう未来だった。

最後にティッシュが投げ入れられるゴミ箱の後ろには、そのとき偶然溜まっていたゴミ袋を2つ置いた。この画作りには絶望感を強調するという意図がある。

当初、卒業制作でこのようなオチの作品を作っても良いものかと葛藤したが、今までの自分の殻を打ち破りたいと思い採用した。



「現実」と「非現実」の両立を目指す映像作品『箱庭ユニリアル』

反省点

まずは自分以外の作品について記述する。

他3人の作品では主に演者を担当した。演技の経験などほとんどないため、NGを頻発し、スタッフたちには苦勞をかけた。演技をするときは、自分や人が普段どんな動きをするかということを意識した。しかし、不思議なもので、意識した途端にその通りに動けなくなるのである。普段何気なく自分がやっている動きも、カメラを向けられると、どこかぎこちないものになってしまう。制作を通して、演技を生業とする人々の凄まじさを知ることとなった。

続いて、自分の監督作品について記述する。

まず脚本の内容について、初めて真剣に物語を創作したが、終わってみれば多くの場面で詰め甘さに気付く。結局、彼らに届いたメールは誤報だったのか、送信者は誰か、そもそも命が芽生えるまでのシステムはどのようなものかなど、多くの謎を残してしまったことが悔やまれる。自分の中にイメージがあっても、それを明文化するのはとても難しいということを知った。

続いて撮影について、カメラワークが雑だったことが反省点である。特に悔やまれるのは、編集画面で映像を見るまでピントが合っていないことや壁の端が見切れていることに気付かなかったというところだ。撮影している間は自分が作った脚本が次々と形になっていく面白さに酔いしれ、映像の質について盲目的になってしまった。1つのことに集中しすぎて他のことが疎かになってしまうことがないよう、今後は意識したい。

次に演技についてだが、脚本を書き起こす際、始めから演者の3人をそのままイメージしていたので、多少棒読みではあったが、違和感はそれほどなかったといえる。反省点があるとすれば、こちらから演技についてリクエストするとき、直前に撮ったシーンをもっと意識すべきだったというところだろうか。監督と演技指導の無茶な要求に応じて奮闘してくれた3人に感謝の意を述べたい。

最後に全体を通して、各々の監督作品で各々がリーダーシップを発揮できているように思えた。

これは大学入学当初と比べ、4人の大きな成長といえる。また、自分の監督作品でなくても、監督が迷ったときは役割を問わず、積極的に意見を出し合えたのも良い傾向であった。今回の合作は、他人の意見の良いところを取り入れて互いに切磋琢磨するということを学ぶとても大切な機会となった。

参考資料

『ショーン・オブ・ザ・デッド』 2004/英/監督：エドガー・ライト
『ジョッカー父さん』 よしもとアール・アンド・シー販売『EP FILMS』より

クレジット

作品名『箱庭ユニリアル』

作品1 (ブリッジ) 『定まらない距離感の話』

監督・撮影・編集

吹田拓美

出演

学生A/櫻井大督

(メディア社会学科2回生)

学生B/田中孝明

Aの友人/前田悟

Bの友人/北川貴啓

作品2 『本物の話』

監督・脚本・撮影・編集

北川貴啓

出演

学生・ドッベルゲンガー/田中孝明

電話の向こうの男(声)/北川貴啓

照明

吹田拓美

AD

前田悟

作品3 『異世界の話』

監督・脚本・編集

前田悟

出演

スーツの男／前田悟

学生／田中孝明

撮影

北川貴啓

照明・A D

吹田拓美

作品4 『生まれる前の話』

監督 脚本 撮影 編集

田中孝明

出演

命兄／前田悟

命弟／北川貴啓

男／櫻井大督

演技指導・A D

吹田拓美

協力

京都学園大学放送局